

特定非営利活動法人 日本免疫学会
2025 年度 後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	國石 茉里	会員番号	0033442	
申請者の所属・職名	富山大学 学術研究部薬学・和漢系 分子細胞機能学研究室 助教			
出席会議名	International Cytokine & Interferon Society – Cytokines 2025			
発表論文タイトル	Reduced Mucosal IgA Production in <i>Traf5</i> -Deficient Mice			

実施結果:

この度は、2025 年度 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award に採択いただき、誠にありがとうございます。

私は 2025 年 11 月 2 日から 11 月 5 日まで、米国シアトルにて開催された第 13 回 Annual Meeting of the International Cytokine & Interferon Society (Cytokines 2025) に参加しました。会場はシアトル中心部の The Westin Seattle で、Pike Place Market が有名なエリアに位置しており、坂の多いダウンタウンの街並みや海の眺めが印象的でした。本国際会議は、サイトカインおよびインターフェロンに関連する免疫学研究の最前線が集結する場であり、ご高名な先生方から直接最新の知見をご共有いただける、大変貴重な機会となりました。

本学会において私は、「Reduced Mucosal IgA Production in *Traf5*-Deficient Mice」のタイトルでポスター発表を行いました。本研究の背景として、TNF 受容体関連因子 TRAF5 は、CD40 や LT β R を含む TNF 受容体スーパーファミリー、ならびに IL-6R の gp130 を介したシグナルに関与するアダプタータンパク質として機能することが知られています。一方で、生体内における免疫応答制御機構については、十分に解明されていませんでした。本研究では、*Traf5* 欠損マウスにおいて、粘膜組織の定常状態における IgA 産生が低下することを明らかにし、さらにその制御に APRIL (TNFSF13) を介した IgA 産生機構が関与する可能性を示しました。IgA は腸管免疫のみならず、粘膜免疫全般の恒常性維持に重要であり、その制御因子の理解は炎症性疾患の病態解明にも寄与すると考えています。

発表当日は、アメリカや韓国をはじめとするさまざまな国の研究者の方々に発表を聞いていただき、具体的かつ建設的な助言を数多くいただきました。これらの助言は、今後の実験計画の改善に直結するものであり、国際学会ならではの議論から得られる実践的な知見として、大変有益でした。

さらに、本大会の Keynote Speaker である Charles M. Rice 先生 (2020 年ノーベル生理学・医学賞受賞者) の講演を拝聴しました。Rice 先生は、ご自身の長期にわたる基礎研究の積み重ねを踏まえ、C 型肝炎ウイルス研究の歴史から治療法開発に至るまでの歩みを語られました。仮説の設定、実験系の選択、検証の繰り返しという研究過程を通じて、研究を推進する上での根本的な姿勢の重要性を学ばせていただく、非常に示唆に富む講演でした。

また、懇親会や若手研究者の交流会にも参加しました。英語での交流に緊張する場面もありましたが、多国籍の研究者の方と研究生活やキャリア形成に関する意見交換ができたことは、自身にとって非常に刺激的な経験となりました。異なるバックグラウンドを持つ研究者との対話を通じて、自身の研究視点を広げる機会を得られたことも、本学会参加の大きな意義であったと感じています。

最後になりますが、このような貴重な機会をお与えくださいました岸本忠三先生、選考委員の先生方、ならびにご推薦いただきました宗孝紀教授に、心より御礼申し上げます。本学会で得た知見を今後の研究に活かし、微力ながら免疫学のさらなる発展に貢献できるよう、今後も邁進して参ります。

注) 本参加記は手書きでなく、Word を使用して作成してください。